

お話の材料は何處に求むべきか

早蕨幼稚園長 久留島武彦

私は保母の方々から時々「お話の材料は何處に求めたらばいゝでせうか」といふやうな質問を受けることがあります。私はこれまで斯ういふ問ひに接する毎に何時も自分で適當と思ふお話の集めてある本をお知らせして來たのでありますが、この頃になりまして古事記の神代の巻が幼稚園時代の子供に對して實に豊富なお話の庫であることに氣が附きましたので、前に述べましたやうな質問をなさる方々には「古事記の神代の巻をお讀みになつたら如何でせうか」といふやうなお答へをすることにして居ります。

西洋にも却々面白いお話は澤山あります、西洋の諸國はそれ〴〵獨特の神話傳説を持つて居ります、而してその國の文學と切つても切れない關係

を持つて居ります。西洋の神話傳説は相當に批評眼の備つた大人が之を讀む時にはその神話を持つ國民の國民性を窺ひ知ることが出來たりなぞして非常に參考にもなり、興味も深いのであります、しかしこれを何物でも素直に受け容れる幼児に話して聞かせる段になると彼等に興味を起させることが出來るか否かの前に、民族的素質の異つて居る西洋諸國民の神話傳説を無批判的に日本の子供の世界に紹介することの些か輕舉に失する傾きのあることに注意が拂はれねばならぬであらうと思ひます。

古事記は言ふまでもなく、我々の祖先の一番最初の、飾りなく語られた素朴な歴史であります。その時代に於ける我々の祖先は、今までの日本國

民の發達の上から言ふと、丁度幼稚園時代に在るものであります。幼兒はその相當時代の藝術をよく理解することが出來ます、何故ならば、それは幼兒に取つて出來過ぎた藝術ではなく、彼等に丁度適應した藝術であるからであります。古事記は天地開闢から天御中主、神以下鶉葺草葺不合、尊までを上卷とし、神武天皇以下應神天皇までを中卷とし、仁徳天皇以下を下卷として居ります、いづれを取つてみても、興味津津たるものがありますが、幼兒に話すものとしては、殊に上卷、中卷あたりが面白いやうに思はれます。

古事記の記事は言ひつき語りつきして、我が祖先の間に殘されて來た日本民族勃興史を千餘年も經つて後に始めて編述したものでありますから隨分怪奇妄誕に類するやうな部分のあることは否まれません。従つてこれを全然史的事實とすることは六ヶ敷いでありませうが、而かも尙私達は古事記の記事によつて、我々の祖先の生活状態を推知

し、その理想の純潔であつたことを讚賞するに難くはないのであります。古事記は實に日本國民に取つて、千古不磨の大歴史、大藝術であると申しても差支ないのであります。

我々と同じ血を持つてゐた我々の祖先に關する斯くまでに興味の深い、刺戟的なお話に充たされて居る古事記を顧みずに、徒らに遠きのにのみ、お話の材料を求めやうとするのは些か本末顛倒の感がないでもありません。私達が古事記を生かしてお話するとき、兒童達は何時も、瞳を輝かして熱心に聽き惚れるのであります。

古事記は本居宣長の古事記傳（四十八卷）を始めとして、註釋書はそれこそ汗牛充棟も當ならずといふ有様でありますから、今日我々が古事記の傳ふる内容に接することは實に容易であります。古事記を基として之をやさしいお話に書きかへた本が今日では既に澤山發刊されて居ります。私の書齋にあるものだけでも次の數種に上ります。

高木敏雄著 建國神話

高木敏雄著 日本神話物語

高木敏雄著 日本國民傳説

高木敏雄著 日本國民傳説

高木敏雄著 日本國民傳説

最後の「新譯日本書紀」は古事記に依つたもの

ではありませんが、古事記と同じやうな我が國の憑據的な古典を取扱つて居るといふ點で御參考にまで擧げたのであります。

私は兒童をよく理解して居る文學者が古事記を全體に亘つて適當に書きかへてくれるといふと思つて居ります、これは實に價値のある仕事であります、日本を愛することの最も熾烈な文學者は逸早くこの仕事に赴くべきであるやうにさへ今私には思はれるのであります。何故ならばそれはルネ・バザンをして佛蘭西の子供の爲めに「ラ・ドウス・フランス」の一卷を書かしたと同程度若しくは以上の愛國の情によつて裏付けられなければなら

ぬ仕事であるからであります、而して斯る仕事は日本國民にとつて最も望ましい仕事の一つであることは言ふまでもありません。

私は又、十八史略や史記列傳や漢書や蒙求の中に幼稚園の幼兒に話すのに適したお話の尠くないことを附加へてお知らせして置きたいと思ひます。

是等の書は我々より一代前位までの智識ある日本人には大抵親しまれたのであります、近頃はあまり讀まれぬかして話題にも止らぬやうであります。殊に是等の書からお話の材料を獲て來て、やさしく分りよく幼兒に話すといふやうなことは殆んど皆無と言つてもよい位であります。

私は先日、汽車の中で、ボーイの持つてゐた新撰漢文讀本といふのを一寸借りて見ましたら、例の「蘇武持節」のお話が出て居ました。何心なくいゝ加減に頁を繰つてゐた私はこの時、不圖、「これは實にいゝお話だ、話しやうによつては確かに幼兒にも分るお話である」と考へました、そこで

早速函館へ行つた時、子供達に蘇武のお話をする
ことにいたしました。幸ひに大變受けがよかつた
やうであります。その時のお話の筆記が今私の手
許に來て居ますから、少し長くなりますがお目
かけませう。支那は外國とはいへ、我國とは同文
同種の國で、昔から深い關係がありますので、そ
の神話傳説の如きも割合に日本人の氣質にしつ
りと合ふのであります、それで蘇武が天皇の爲め
に節を曲げなかつたなどといふお話は幼兒にもよ
く理解されるのであります、

○雁が郵便配達になつた話

支那と云へば、日本のお隣の國。其の支那の國
に、昔むかしずつと昔武帝と云ふ天子様がありま
した此の天子様は、大變好い天子様で、御家來を
お可愛がりになるばかりか、外の國の人でもよく
氣をつけてお遣りになりましたので、誰でも此の
天子様の爲めなら、如何な事でも爲て上げやうと

思つて居ました。

ところが此の天子様の御領分のずつと北の方
に、廣い／＼砂原のお國があつて、其また北に廣い
廣い別のお國があつて、其のまた北に廣い／＼別
のお國があるのですが、其處は一年の半分は雪に
埋められて居るのですから寒い／＼不自由なお國
です、其の寒むい國に住んで居る者の事を匈奴と
云ひその王様の事を單于と申して居りましたが、
此の王様は、意地の悪い癖のよくない質の方で、何
でも人の嫌がる事を平氣でしては喜んで居る、そ
して時々は大勢の悪い家來を連れて、砂原の國を
横斷つては北方の國に入つて來て、人や金を攫つ
て行つたり、羊や豚を盗んで行つたりするので、
皆困つて居りました。

武帝は、此の事をお聞きになると、憎い奴だ一
つ兵隊を連れて行つて攻亡ぼしてやらうかとお考へ
なさつたが、根がお氣質の良い天子様ですから、
直ぐに考へ直して、これは單于の國が寒い國で何

も出来ない處だから、他處の物をとる様な考へになるのであらう。平素の悪い癖を直して、此方と仲の好い國になれば、欲しい物は何んでも送つて遣るのにとお考へになつたので、其事を言聞せるために、使をお遣りになる事になりました。

此お使に選ばれたのは、蘇武と云ふしつかりした御家來でした何しろ意地悪の王様によくく解るやうに言聽かせてやるお役目ですから、通常の人では出来にくい事です。蘇武は此大事のお役目を命付けられると、早速家に還つて、お父様とお母様とに御相談を爲て見ました。

蘇武のお父様は、天子様の仰せならば、如何な事でも爲なければいけない御家來も澤山有る中に、お前が選み出されたのは名譽の事だとお賞めになり。お母様は大事のお役目だから身體をよく氣を付けて、天子様に御返事を申上るまでは死ぬ様な事があつてはいけませんよと、よくく言ひ聞かせました。

愈々蘇武が出立する事となりますと天子様は、蘇武に美事な「天子からのお使ひ」の節しちを下さいました。

蘇武は幾日もくかゝつて、砂原の國を通りぬけ、それから復幾日もくかゝつて匈奴の國に参りました。そこで王様の單子に遭つて天子様からのお言葉傳へますと、意地悪の單子は、鼻のさきで笑つて、何を生意氣な事を云ふ慾しければ盗みに行く、取りたければ取つて來るのだ、お前の國の天子様などに頭を下げて貰うには當らないと、取つてもつかぬ挨拶で、お使ひの蘇武は其儘大きな窖の中に投込まれて了ひました、其暗闇の窖の中は氷の窟に入つたやうで、身に浸み込むやうな寒さが耐へがたい上に、喰べる物とは何もないので、蘇武は段々弱つて行きました。斯して弱らせて、殺して了はうと單子は考へたのです。

蘇武は此事を思ひますと出立の時にお母様が言つて下さつた言葉を考へ出しました。大事なお役

目だから、御返事を天子様にする迄は死んではならないと云ふ事です。蘇武は弱つた腕を取りしげつて、

「これは如何しても死んではならない。」

と考へました。併したる物は何も無い。喰る物はなくして如何して生きて居やうかと考へて居りますと、不圖思ひ付いたのは、此窖に投込まれる時、牢番が一緒に入て呉れた一枚の羊の皮の敷物です。左様だ、此の毛でも食べれば食べられない筈は無いと思ひましたので、それから飢じくなれば毛皮の毛をむしつては食べて居りました。

牢番は食物を遣らぬのだから、もう死んだ頃だと窖の中を覗いて見ますと、蘇武は端然と坐つて横に「天子様のお使の節」を置いて大きい眼を開けて居ります。

「おや／＼此奴は變な奴だぞ、何も食べないで生きて居るとは不思議な奴だ」と先づ牢番が驚きまして、段々上役人に申立てましたので、皆寄つて

來ては覗いて見ますが、幾日經つても一向に死ぬやうな様が見へません。蘇武は入れられた時の姿を其儘、端然と坐つて居りますので、匈奴は少々氣味が悪くなつて來ました。

「あれは普通の人では無いせ。」

「喰はず飲まずに生きて居るとするとひよつとすると仙人と云ふのかも知れないせ。」

と段々評判が高くなつて、これが王様の單于の耳まで入りますと、殺すつもりで窖に入れて死なぬやうでは入て置いても甲斐が無い、それならば引出して連れて來いと云ふので、蘇武は單于の前に引出されました。

蘇武は相變らず、武帝から賜つた「天子様のお使の節」を持つて悠然と單于の前に立ちました。

單于は蘇武に「如何だ降参しないか、降参して立派な役目にして使つて遣るが」と云ひますと、蘇武は莞爾笑つて「私の手に持つて居るのは何ぞ御座いますか」と聞きました。單于は「それはお前

の國の天子からの使の節よ」と云ひますと、「其節を持つて居る私は武帝の使者です。武帝の使者は武帝に還る事は知つて居りますが、他に御奉公する事は知りません」と答へました單子は眞赤になつて怒つて。

「それ程武帝の下に還りたければ此の羊が乳を出すやうになつたならば還して遣る。」と云つて、蘇武に百頭ばかりの羊を渡しました。そして此の湖のそばで勝手に飼へと云ふ命令です。

蘇武は斯うして窖からは出されましたが、寒い／＼北の湖の畔で毎日羊を飼ふ事となりましたが、相變ず食べる物は無い。それでも窖の中より勝^{まさ}なでの、草の實を搜して喰べ、土鼠を捕へては喰べて、早く飼つて居る羊が乳を出すやうにと氣をつけて居ますが雪が降るやうになつても、何の羊も乳を出さない、其の雪が消えて無くなつても羊の頭も乳を出さない。

餘りの不思議さに蘇武は、一頭々々よく調べて

見ますと、何の羊も皆牡羊ばかりで、一頭も牝羊は居ないのです。

お母さんになる羊は居ないのです。蘇武は失望して死んで了はうかと思ひました。これでは何十年何百年飼つて居つても乳の出る羊は居ない、乳の出る羊が居なければ自分は天子様の下に還る事が出来ない、そうして此の雪の荒れ野原の中で、一生涯過ぎさなければならぬならば寧ろ死んだ方がよいかも知れない羊の群の中で呆然と立つた蘇武の眼からは、涙がホロ／＼とこぼれました。

恰度此の時蘇武の頭の上を棹になつて南の方に下つて行く雁の群が、がア／＼と啼いて行きました。蘇武は不圖頭を上げて、此の姿をながめますと、何と思つたか莞爾と笑ひました。そして元氣よく湖の邊に行きました。

天子様は、蘇武を匈奴に使者におやりになつてからは、毎日其の還つて來るのを待つてゐらつしやいました。國は随分遠い國、途は随分不自由な

道で、其の湖には人も居らねば、草も木も生へて居無い砂原の廣い／＼國があるのですから、これを通つて往還を爲すのは随分長くかゝるのですが一年経つても蘇武は還つて來ませぬ。花が咲いて花が散つて、木の實が熟して木の實が落ちて、冬になつても還つて來ませぬ。春になつても還つて來ない。其の冬も其の春も二度も三度も、五度も七度も兩方の指を皆折つて了うまで數へても蘇武は一向に還つて來ませぬ。

天子様は御心配なさつて、二度目の使をやつて蘇武は如何して居るかと聞かせに遣りますと、匈奴の返事は、もうそんな人は疾うの昔に死んで了つたと云ふ事でした。

何處で死んだか、如何して死んだかと聞かせて見ましても、其後は一向に返事も爲ないのです。天子様は如何も蘇武は死んで居りさうには思召さぬのですが、尋ねる工夫も無くて困つて居らつしやいよしました。

ところが或日武帝のお子様がお出でになつて、雁を澤山射つてお持還りになりました。そこで早速お臺所の者にお料理を仰付けになりましたのでお臺所の役人は羽を引くやら毛を焼くやらして居ますと、一羽の雁の足に何か結び付けた物がありました。

「おや、これは變な物が附着いて居るぞ。」

と、その脚に附いて居る物を取放して見ますと、古い／＼垢のついた布の端に草の實の汁でゝも書いたのか薄い字のあとが見えます。これは不思議な物が括り付けてあつたと、早速上役の者に差出しますと、此の古布に書いた文字こそ匈奴にお使者に行つたまゝ死んだと云はれた蘇武からの手紙の文字で、今も生きて、此の湖邊の雪の中で羊を飼つて居ると云ふ報せの意味です。これを御覽になつた天子様は如何なお喜びになつたでせう、早速三度目のお使者に澤山の兵隊をつけて蘇武を迎ひにやりました。

匈奴の方では相變らず蘇武はもう疾くに死んで了ましましたと云ひますと、お使者は雁の脚に附いて居つた布のお手紙を出して、これでも蘇武は死んだと云へますかと申しましたので、匈奴も最早僞言を通す事が出来なくなつて王様の單于も平あやまりに謝罪り澤山の品物を出してお詫のしるしに蘇武に持たせて還しました。

蘇武はお父様のお賞めを受けたゞけの名譽のお使者として立派に天子様から賜つたお使者の節を護つて還つて來ました。尙お母様のお言葉をもつて役目を果すまでは身體を大事に氣を付けて、害の中にも死なず、雪の中にも凍えず、立派に還つて來たのですが長い間の心配と、辛い困しみに遭ひましたので、髮の毛も鬚も皆眞白になつて、お父様の前に立つた時何方がお父様か解らなかつた程でありました。

天子様は蘇武の忠義な精神と智慧のある働きをお褒めになりましたして立派な役目にお取立になつ

て、それから一生仕合に過ごしました。

此の事からして、お手紙の事を、雁の玉章とも雁信とも云ふ事となりましたそうです。(をはり)

簡潔な漢文の傳へるお話は幼兒に向つて話す場合には、話す人が餘程敷衍して、具體的に話さないと効果が舉りません。それ故蘇武のお話なども餘程具體化してあります。

蘇武があれほどに艱苦して「天子のお使の節」を守つてゐたといふことは西洋の幼兒には一寸理解されないかも知れません。しかし日本の幼兒にはよく理解されます。「天子様のお爲めに」といふ言葉は、日本に於ては、幼兒にも實によく理解されるのであります。これは日本國民として忠君といふことを感情としても長い年月の間に遺傳的に養成させられて來た結果でありませう。故に君に忠親に孝といふやうなことを訓へた支那のお話は、大抵そのまゝ取つて來て我國の幼兒に話して聞かせることが出来るのであります。(文責在記者)